

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：11601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12359

研究課題名（和文）統語的融合体の内部構造と使用に関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文）Theoretical and empirical studies on the internal structure and use of syntactic amalgams

研究代表者

佐藤 元樹（Sato, Motoki）

福島大学・人間発達文化学類・准教授

研究者番号：00737942

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、John invited you 'll never guess how many people to his partyに例示されるAndrews融合体として知られている構文の省略によって隠された内部構造を探求した。Andrew融合体は、縮約されたwh間接疑問文やwh間接感嘆文であることが指摘されている。本研究は、Andrews融合体はsluicingとして知られている省略構文の一種であるが、統語と形態のインターフェイスにおいて複合語句として再分析されていることを提案した。そして、本分析により、その文法特性とその分布が説明されることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまでの統語研究や英文法の解説書において注目されることがなかった統語的融合体について、その文法的特性を記述し、新たに省略現象の観点から捉え直した研究である。統語的融合体は、不完全な文の形式をしているが、その解釈は句で言い換えられる。この形式と意味の不一致は、融合体が統語論と形態論の両インターフェイスに関わるために生じることを示した。また、本研究は、統語的融合体がGod knows wh-のような慣用表現やdon't knowのような述語の型に固定されているのではなく、疑問縮約（sluicing）が文法的に認可される環境であれば、幅広い表現が認められることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study explores the (hidden) internal structure of what is known as Andrews-amalgams, exemplified as John invited you 'll never guess how many people to his party. It has been noted that Andrews-amalgams look like reduced indirect wh-questions or wh-exclamatives. This study proposes that Andrews-amalgams are types of elliptical constructions known as sluicing but are reanalyzed as complex words or phrases at the syntax-morphology interface. The proposed analysis can account for the grammatical properties and its distribution.

研究分野：英語学

キーワード：融合体 sluicing 感嘆文 挿入節 複合語句

1 . 研究開始当初の背景

本研究が対象とする構文は、Lakoff (1974: 321)によって指摘された、縮約された間接疑問文が文中で句として用いられる現象である。Lakoff があげた代表的な例である (1) では、invited の目的語の位置を占めている斜字体の表現が「見当がつかない(多くの)人」という数量を伴った名詞句のように解釈される。

(1) John invited *you'll never guess how many people* to his party.

(1)のような構文には、定まった名前がついていないが、発見者の名前に因んで Andrews 融合体と呼ばれている。中立的に wh 融合体や統語的融合体と呼ばれることがあるが、本稿では、単に融合体と呼ぶことにする。この現象の興味深い点は、斜字体の表現が不完全な文や節の形をしながら、名詞句の性質を合わせもっていることである。この二つの性質から、融合体を分析する立場もまた、文の性質を軸に考える立場と、句の性質を軸に考える立場の二つに分かれている。

融合体を文とみなす立場では、(1)の斜字体の表現を挿入節や挿入文のように分析する。挿入節分析は、融合体に二つの文を仮定する。例えば、(1)の融合体は、(2a)の文に、縮約した間接疑問文 (2b) を組み込むことで派生されると分析する。(取り消し線は、省略を示している。)

(2) a. John invited people to his party.

b. You'll never guess how many ~~people he invited to his party~~.

挿入節分析が文を組み込むときに仮定する統語操作は、ミニマリスト統語論の枠組みの中でも特殊な併合操作となるため、併合操作の定式化が理論的な課題となっている。

一方、融合体を句とみなす立場では、(1)の斜字体の表現を a lot of people のような(複合的な)名詞句として再分析する。

(3) John invited [_{NP} [_{QP} you'll never guess how many]] [_N people]] to his party.

融合体の数量的解釈を構造に反映させると、融合体は people を主要部とした名詞であり、you'll never guess how many が数量詞句として、people を修飾しているように分析される。複合句分析では、融合体为名詞句であることを直接的に捉えているが、修飾部である you'll never guess how many が不完全な文の構造を有していることが説明できない。

このように、二つの文が組み合わさってできた融合体は、不完全な文の形式をしながら、文と句の両方の性質を持ち合わせている。この文法的性質を理論的に捉え、実際の使用条件を予測することが本研究の目的である。

2 . 研究の目的

融合体を対象とした研究は数が少ないが、先行研究の中では、音声化される部分の内部構造の研究に重点が置かれてきた。そのため、融合体にある不完全な部分の構造については明らかにされていない。本研究では、挿入節分析で仮定されているように、省略されている表現も融合体の一部と見なし、融合体の形態・統語的構造を明らかにすることを目的とした。省略部の構造が解明されることにより、統語的融合体が実際に使用されるコンテキストも明らかになることが予測される。

3 . 研究の方法

融合体の統語構造を解明するために、融合体を以下の(A)～(C)の三つの部分に区分して形態統語分析を進めた。(A)は数量詞句に相当する融合体の修飾部であり「主語 + 述語 + 疑問詞」の三つから構成される。(B)は融合体の意味的・統語的中核部であり、主節と直接的な関わりがある。(C)は本研究が新たに仮定している省略部である。

(4) John invited (A)you'll never guess how many (B)people (C)~~he invited to his party~~ to his party.

この三区分に基つき、挿入節分析と複合語句分析を比較検討し、それぞれの分析の利点と欠点、および理論的帰結を探求した。

4 . 研究成果

本研究は、融合体が挿入節分析と複合句分析の両方が予測する文法特性を示すことを経験的に示した。また、理論的側面では、融合体の分析には、両分析の視点が必要であり、純粋な統語分析だけでは、融合体の構造構築が成り立たないこと示し、ハイブリッドな分析方法を提案した。

統語部門だけではなく、形態部門とのインターフェースを仮定することにより、挿入節分析で困難であった主節との併合関係を形成し、複合句分析で困難であった融合体の構成的側面を解決した。新たな分析方法については、学会および論文で発表している。以下の 4.1 節では、本研究の経験的研究成果について、4.2 節では、理論的研究成果についてその概略を述べる。

4.1 経験的研究成果について

4.1.1 主節要素の一部となる融合体修飾部

融合体の修飾部は、挿入句的性質を示すことが先行研究によって指摘されている。本研究では、修飾部の文法的特性を確認するために、文献調査及び英語母語話者の聞き取り調査を行った。調査の結果、修飾部は、先行研究で指摘されているように主節の作用域に含まれないことが確認された。しかし、新たに、修飾部は省略や照応の先行詞に含まれることが明らかになった。例えば、以下の例では、and で結ばれた第二等位項の省略や照応箇所、第一等位項にある融合体の意味が復元される。

- (5) a. John ate I don't know what yesterday, and Mary {did / did so} too.
b. She invited you'll never guess how many people to her wedding party, and her husband {did / did so} too.

このような照応関係は、完全に独立した挿入句や挿入節には観察されない特徴である。そのため、融合体の修飾部が省略や照応の先行詞に含まれることは、先行研究とは異なり、融合体の修飾部が構造上、主節に属していることを示唆している。

4.1.2 修飾部と中核部の併合関係について

融合体の修飾部で使用する述語の種類を調査した結果、融合体の意味的中核部である wh 句が形容詞によって選択される事例があることが分かった。

- (6) John invited it is obvious how many people to his party.
(Tsubomoto and Whitman (2000: 180))
(7) He devoured it's completely unclear how many cookies.
(Johnson (2014: 277, fn. 13))

上記の例で用いられている obvious や(un)clear といった形容詞は、その直後に wh 節を置くことはできるが、名詞を続けることはできない。

- (8) a. Somebody had called, but it wasn't clear who (had called).
b. *It wasn't clear {his idea(s) / the correct approach}. (Merchant (2001: 44-45))

このような形容詞の下位範疇化と格付与能力を考慮すると、(6),(7)の融合体では、形容詞は後続する名詞句や数量詞句と併合したのではなく、以下のように、wh 節と併合した構造を持つと考えられる。

- (9) a. John invited it is obvious [how many people ~~he invited to his party~~] to his party.
b. He devoured it's completely unclear [how many ~~he devoured~~] cookies.

このような融合体の例は、融合体の省略部に節構造があることを示唆する証拠である。

4.1.3 融合体の省略について

融合体は、縮約された間接疑問文が文中で句のように振る舞う現象であるが、融合体の修飾部で使用される述語の種類によっては、間接感嘆文に由来していると分析される事例も見受けられた。

感嘆文における節省略現象を研究した結果、感嘆文では融合体の形成に関わる sluicing と同一の節省略が適用できないことが明らかになった。この研究結果から、間接感嘆文に由来した融合体は、文法的には、生成されることが分かった。本研究が正しい限り、間接感嘆文に由来していると思われる融合体の事例は、形式的には間接疑問文であり、感嘆文に似た解釈は、修飾部で用いられている述語の意味特性と語用論的要因から生じると分析される。

4.2 理論的研究成果について

本研究では、融合体の形成に、挿入節分析と複合句分析を合わせたハイブリッド分析を提案した。本分析に基づくと、(1)の例は、以下の二つの文から派生される。

- (10) a. John invited to his party.
b. You'll never guess how many people ~~he invited to his party~~.

本分析は、挿入節分析と同じように、二つの文を組み合わせたものを統語部門では行わない。より具体的には、(10b)を(10a)における invited の目的語と併合する前に、形態部門で、語として書き出し、語として再分析した(10b)を統語部門に再度導入する。このような派生を仮定することで、修飾部の文法関係や意味的合成性の側面を維持したまま融合体を形成することができる。文を語として書き出す方法として Spell-Out を援用しているが、本分析では、挿入のための特殊な併合操作 (Pair-Merge や Late Merge) を仮定する必要がないのが利点である。また、本分析が正しい限りにおいて、統語と形態のインターフェースは、形態から統語への一方通行ではなく、双方向の関係であることを示唆した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐藤元樹	4. 巻 36
2. 論文標題 wh融合体の形態・統語構造について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 155-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤元樹	4. 巻 -
2. 論文標題 感嘆文におけるsluicingについて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本英文学会東北支部第77回大会プロシーディング	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐藤元樹
2. 発表標題 wh融合体の形態・統語構造について
3. 学会等名 日本英語学会第36回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤元樹
2. 発表標題 感嘆文におけるsluicingについて
3. 学会等名 日本英文学会東北支部第77回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1．著者名 島 越郎、富澤 直人、小川 芳樹、土橋 善仁、佐藤 陽介、ルプシャ コルネリア（編）	4．発行年 2022年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 416
3．書名 ことばの様相	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------